

恋に付ける薬はないらしい。

恋心を自覚して数日が経過した。自覚してしまうと、帝人が笑うだけで心臓がばくばく言ったり、とにかく触れないと思ったり、何かと困惑することが増えた。

相変わらず、帝人は毎日夕食を作ってくれる。場合によっては朝食の準備までしてくれる。

「へえ。じゃあそのうち愛妻弁当を作ってくれるかもね」  
興味なさそうに相づちを打ちつつ、新羅が言った。  
愛妻弁当。

その響きはすばらしく甘美で魅惑的ではある。確かに希望すれば作ってくれるかもしれない。帝人の分も作れば彼の昼食にもなるし、言う価値はあるかもしれないとぼんやりと思う。

「そういうえばこの間、昼食用にセルティがサンドウィッチを作っていつてくれたんだ。これって愛妻弁当だとは思わないかい？」

ああセルティ、と現在仕事中でこのマンションには不在の恋人を抱きしめるようなそぶりを見せる新羅は真実、気味が悪い。

しかし、静雄には友人が少ない。

新羅は闇という頭文字がつくが医者には違いないので、恋心を押さえる薬はないものかと相談してみることにした。

今日は仕事が休みで暇だったことも大きな理由だ。夕方には学校から帰った帝人が夕食を作りに来てくれるだろうが、それをそわそわとただ待つのはあまりにも時間の流れが遅すぎる。

そうして真剣に相談した結果、目の前の友人はあっさりと『ないよ、そんなの』と断言した。藪医者め、と内心で思う。

静雄が帝人に恋していることを帝人が知れば、気味悪く思うかもしれない。距離を置かれる可能性はかなり高いだろう。そうなれば、この幸福な日々が終わってしまう。ならば、この感情をどうにかコントロールできないだろうか。大真面目に考え、悩みつつ相談したのに、新羅がひらひらと手を振り『無理無理』と言った。

「しかし、意外だなあ。そりや帝人君は確かに静雄を怒らせないだろうけど、まさか恋するとはね」

「俺だって予想外だ」

「まあ、そうだよ。恋はいつだって予想外だよ。僕だってセルティに会うまでセルティに恋するなんて予想外だったからね」

うんうん、と新羅が頷く。

「まあとにかく、恋心を調整する薬なんてないよ。告白するなり、現状維持につとめるなり、静雄のしたいようにするしかないんじゃないかな」

「告白なんてできるわけねえだろ」

「すればいいと思うけどなあ」